

待ち人

ヒロシ

土が雨で濡れて歩きにくい。一步踏み出す度に靴がネチヨリと音をたて底が埋まる。

目の前に3m程の段差が現れたが、なんとか登れる角度だ。生えている木の根を手がかりに登っていく。底靴についた泥の重みで今にも靴が脱げてしまいそうだ。

ようやく登り切ったとき、赤いものが視界に入った。20m程先だろうか。道の先でゆらゆらと揺れている。

よく見ると赤いワンピースを着た髪の長い女だということがわかった。表情はわからない。女は両足を中心にし、頭で円を描くように揺れている。

「見てはいけない」

本能が警告を出し、私はそばに生えている大木へ隠れた。

周囲の音は何もなく、自分の鼓動がやけに響く。大木へもたれかかり呼吸を整える。

これは夢だ。

私は気付いた。そこでこの不可解な状況から脱出すべく、すぐに夢から醒めようとした。

目をギュッと閉じてテレビのリモコンを思い浮かべる。頭の中に幼い頃実家に合った古いリモコンが現れた。何故か知らないがこのリモコンでなければ夢から醒めることができない。いつものように電源ボタンを3秒押し、パッと目を開けた。

しかし景色は変わっていなかった。女の気配も消えていない。身動きがとれぬまま鼓動が高まっていく。

ネチヨ...ネチヨ...

ネチヨ...ネチヨ...

そんな音が少しずつ近づいてきている。

もう一度目を閉じてリモコンを操作し目を開けるが景色は一向に変わらない。せめて女の存在だけでも消そうとするが上手くいかない。

ネチヨ...ネチヨ...

ネチヨ...ネチヨ...

大木のすぐ傍で音が聞こえる。

女の様子を探ろうとした時、視界の端に赤いものが映った。

思わず目を向けた。

そこには虚ろな瞳で口だけ大きく笑っている女が立っていた。髪がビッシヨリと濡れているが、赤いワンピースは濡れていない。髪は最初に見た時よりも長くなっているような気がした。

髪から滴り落ちる水滴の先に、ドロドロに汚れた女の素足があった。親指が異常に長く、地面の土をがっしりと掴んでいる。

カタカタカタカタ...

直立したままの女の口からそんな音が聞こえ始めた。笑っている。

カタカタカタカタ...

女は肩を揺らし始め、急にピョンピョンと飛び跳ねた。地面につく度に泥が飛び散る。

ピョンピョンピョンピョン...

私の目から視線を逸らさず、女は笑いながら飛び跳ねる。

カタカタカタカタ、ピョンピョン、ネチヨネチヨ

カタカタカタカタ、ピョンピョン、ネチヨネチヨ

私は逃げることができず、目を閉じることさえ出来なかった。

女は飛ぶ跳ねながら少しずつ近づき、私の顔に女の髪が触れた。

いつの間にか私は女の前で飛んでいた。女は私を暫く眺めた後、森の奥へと消えていった。
私は跳ね続ける。

足の疲れを感じながらも止めることが出来ない。

雨の日、私の足は止まった。

そして今、私は頭をゆらゆらと揺らしている。

私は誰かを待っている。

カタカタカタ...